

表1 JFAの取り組み

●JFAサッカーファミリー安全保護宣言

1. サッカーにおける暴力・暴言を根絶します。(ゼロ・トレランスの実現)
2. 子どもたちをハラスメントから守ります。
3. 子どもたちの健康を守ります。
4. 良い指導者の養成と有資格指導者を適正に配置します。
5. 暑熱環境下等でのサッカー環境を改善します。
6. 年齢・性別・障がい・人種に関係なく、サッカーを楽しめる環境を整備します。

[https://www.jfa.jp/respect/safety\\_protection/](https://www.jfa.jp/respect/safety_protection/)



●JFAセーフガーディングポリシー

[https://www.jfa.jp/respect/safe\\_guarding.html](https://www.jfa.jp/respect/safe_guarding.html)



●ウェルフェアオフィサー制度

[https://www.jfa.jp/respect/welfare\\_officer.html](https://www.jfa.jp/respect/welfare_officer.html)



扇谷委員長はイングランドではユース審判員が特定のワッペン(U18 REFREES)を任意で着けていることを紹介。審判員の育成にはチーム関係者の理解と協力が必要と説いた

純子委員長は、JFAやサッカー界の取り組みを紹介。2011年のFIFA女子ワールドカップ(ドイツ)で、なでしこジャパン(日本女子代表)が初優勝を飾ると同時にFIFAフェアプレー賞を受賞した際、「勝つこととフェアプレーは両立できるということを証明してくれた」と強調。各年代・カテゴリーの国際大会で日本代表チームが数々のフェアプレー賞を受賞していること、試合後にきれいに片付けられた代表チームのロッカールーム、日本のサポーターによる自主的な観客席の清掃活動など、日本サッカー界の行いは世界から注目されている。「日本は世界のサッカー界において、リスペクトの面で一置かれている国」とした上で、こうした慣習は「代表チームが約束事としてやってきた暴言交じりの抗議や暴力的な行為、あるいは、SNS上で誹謗中傷が横行している状況に異を唱えた。

特にJリーグの試合における審判員への異議や威嚇といった行為は、グラスルーツのサッカーにも波及する可能性があるとして警鐘を鳴らす。

今年8月からJリーグで導入されている「キャプテンオンリー」は、審判がピッチ上で複数の選手が取り囲まれたり、行動による異議にさらされたりすることを回避するための競技規則。主審とキャプテンの連携をより強化することで、公平性とリスペクトを育むことを目的としている。扇谷委員長はこの規則の導入を経て、「非常に良い状況でクリーンに試合が進められている」と評価し、「互いを尊重する精神が若い人たちやグラスルーツの試合にも浸透していつてほしい」と期待を寄せた。そして、「アマチュアの試合でも審判員に対する批判や攻撃は増えている。これによって審判員が不安を抱くようになると、審判員をする人は減り、サッカーの試合がでなくななる状況に陥る」と、審判員への暴言や誹謗中傷をサッカー界全体からなくす必要性をあらためて投げ掛けた。

表2 U-18子どもパブリックコメント2025結果(抜粋)

サッカーがもっとこうだったらいいの、と思うこと

- ・もっと試合に出たい
- ・ベンチで出れないメンバーが居なくなればいい、みんなが均等に出れたらいい
- ・審判への、クレームが、多く、保護者がよく文句を言うので、競技規則を、読んでない保護者に、言われたくない

サッカーを楽しむために減らしたいもの

- ・荒れたプレー、危険なプレー、悪質なファウル、あおりプレー
- ・仲間を責める言葉
- ・指導者の暴力・暴言、パワハラ
- ・遠征に行っても公式戦に一分も出してもらえないこと
- ・選手たちへの誹謗中傷

サッカーをもっと楽しむために自分たちができること

- ・サッカーは楽しいということを忘れないこと
- ・味方が上手にいったことをナイスと声をかけたり、みんなで助けあってチームを作り上げる。リスペクトしつつ高め合う
- ・自分だけの楽しさだけではなく、隣の誰かの喜びをつなぐことができるスポーツだからこそ、みんなで楽しくやる!



●全ての結果はこちら [https://www.jfa.jp/respect/fairplaydays/pdf/JFA\\_U-18\\_Child\\_public\\_comment\\_2025.pdf](https://www.jfa.jp/respect/fairplaydays/pdf/JFA_U-18_Child_public_comment_2025.pdf)



REPORT 2025年度リスペクトシンポジウム

テーマ「暴力暴言の根絶～審判員へのリスペクト」

左から海堀WEリーグ理事、林原審判員、名木審判マネジャー、扇谷委員長

基調講演

日本サッカーの価値観を伝え、守り続けていく

シンポジウムの冒頭、JFAの宮本恒靖会長の動画メッセージが上映され、「選手、指導者、そして現在はJFA会長と異なる立場でサッカーに関わってきた中で暴力や暴言のない安心・安全なサッカー環境の大切さを感じている。そうした環境は、選手や審判員がより一層ポジティブな気持ちや自信を持ってサッカーを楽しむ力になる」と発信。また、レフェリーをした経験を踏まえ、「レフェリーは本当に難しい(役割を担っている)。だからこそ、選手や指導者、ファン・サポーターなど全員がリスペクトし合い、審判員が自信を持って笛を吹ける環境を一緒につくっていくことが大切」と話した。

JFAリスペクト委員会の今井

日本サッカー協会(JFA)は毎年9月をJFAリスペクトフェアブレイデイズとし、全国でリスペクト・フェアブレイを考え、実行する期間としている。今年は9月13日に2025年度リスペクトシンポジウムをJFAサッカー文化創造拠点「blue-ing」とオンラインで開催し、「暴力暴言の根絶～審判員へのリスペクト」をテーマに基調講演およびパネルディスカッションを実施。会場では約50人が、オンラインでは約250人が視聴した。また、シンポジウムの後には、3年ぶりに実施されたりリスペクトアウォーズの表彰式も執り行われた。

■2025年度リスペクトシンポジウム

●テーマ:暴力暴言の根絶～審判員へのリスペクト

日時:2025年9月13日(土)  
会場:JFAサッカー文化創造拠点「blue-ing」、オンライン

【内容】

- ・宮本恒靖JFA会長あいさつ \*動画メッセージ
- ・基調講演1 「暴力暴言の根絶 方向性と進捗」  
今井純子JFAリスペクト委員長
- ・基調講演2 「サッカー競技規則の理念と精神～審判員の役割～」  
扇谷健司JFA審判委員長
- ・パネルディスカッション「審判員へのリスペクト」

登壇者： 扇谷健司JFA審判委員長  
影山雅永JFA技術委員長  
名木利幸JFA審判マネジャー  
林原晴サッカー2級審判員(ユース審判員経験者)  
海堀あゆみWEリーグ理事/なでしこリーグ理事長(元なでしこジャパン)

ファシリテーター：今井純子JFAリスペクト委員長

※役職などは開催時

純子委員長は、JFAやサッカー界の取り組みを紹介。2011年のFIFA女子ワールドカップ(ドイツ)で、なでしこジャパン(日本女子代表)が初優勝を飾ると同時にFIFAフェアプレー賞を受賞した際、「勝つこととフェアプレーは両立できるということを証明してくれた」と強調。各年代・カテゴリーの国際大会で日本代表チームが数々のフェアプレー賞を受賞していること、試合後にきれいに片付けられた代表チームのロッカールーム、日本のサポーターによる自主的な観客席の清掃活動など、日本サッカー界の行いは世界から注目されている。「日本は世界のサッカー界において、リスペクトの面で一置かれている国」とした上で、こうした慣習は「代表チームが約束事としてやってきた暴言交じりの抗議や暴力的な行為、あるいは、SNS上で誹謗中傷が横行している状況に異を唱えた。

特にJリーグの試合における審判員への異議や威嚇といった行為は、グラスルーツのサッカーにも波及する可能性があるとして警鐘を鳴らす。

今年8月からJリーグで導入されている「キャプテンオンリー」は、審判がピッチ上で複数の選手が取り囲まれたり、行動による異議にさらされたり、行動による異議にさらされたりすることを回避するための競技規則。主審とキャプテンの連携をより強化することで、公平性とリスペクトを育むことを目的としている。扇谷委員長はこの規則の導入を経て、「非常に良い状況でクリーンに試合が進められている」と評価し、「互いを尊重する精神が若い人たちやグラスルーツの試合にも浸透していつてほしい」と期待を寄せた。そして、「アマチュアの試合でも審判員に対する批判や攻撃は増えている。これによって審判員が不安を抱くようになると、審判員をする人は減り、サッカーの試合がでなくななる状況に陥る」と、審判員への暴言や誹謗中傷をサッカー界全体からなくす必要性をあらためて投げ掛けた。

しない、させない、許さない  
暴力・暴言の根絶へ

2012年に大阪の高校バスケットボール部の生徒が顧問の体罰を苦に自殺した事件を受け、日本体育協会(現、日本スポーツ協会)、日本オリンピック委員会、日本障害者スポーツ協会現、日本パラスポ

いるのではなく、子どものころから家庭や学校、クラブチームの中で継承されているから自然にできる。その姿は、見ている人にとっても気持ちのよいものであり、高く評価されている。この価値観を日本サッカーに関わる全ての人と分かち合い、大切に守り続けていきたいと述べた。

## 森保一 SAMURAI BLUE監督 メッセージ

レフェリーなくして試合はできない。

前提是对戦相手やレフェリーなど、サッカーに関わるすべての人をリスペクトする心を持つこと。その中で、最終的には審判員のジャッジが正しいと、リスペクトを持って従っていく。

敬意を表することを忘れず試合に挑む。選手とスタッフにもそれを望む。すべてのサッカーファミリーにレフェリーへの敬意を伝えていこうと、自分自身の姿勢や態度を通して感じてもらえるようにしたいと考えている。指導者としてJFAに携わるようになり、レフィリーの皆さんが必死に勉強や準備をされている姿を目の当たりにした。自分たちのジャッジの責任を良い形で全うできるように常に真摯に努力されていることに、敬意を持たないといけない。

レフェリーも成長したいという思いでピッチに立っているので、意見があるときには建設的にコミュニケーションを取る。その姿勢は、自分が選手だったときと変わらない。

選手のレベルを上げるためにも、レフェリーの協力は不可欠。審判とは夢フィールドでよくコミュニケーションをとって、映像を持ち込んでコーチ陣と共に意見交換をすることがある。すごくいい関係にある。

日本サッカーがさらにレベルアップしていくためには、指導者養成等を通して指導者がレベルアップすること、選手たちが日々のトレーニングやゲーム環境の中でレベルアップすること、そして、審判のジャッジ基準が国内と国際でズレがないことが重要。

アーリーヒットに対する基準のように差がある部分を感じるが、それは決してレフェリーの「レベルの差」ということではない。国内で起きている事象が世界でも通じるものとして共有され、つなげていけるように。指導者や選手が初めての国際試合で経験することとギャップがないように。そういう基準をつくるために、コミュニケーションを取っている。

危険なプレーはいけない。ファウルを許容してはいけない。その前提の中で、サッカーにはギリギリのぶつかり合いが必要。選手が強たくましく、プレッシャーを受けながらも技術を発揮できるようにするために、レフェリーもチャレンジしてほしい。

そういった意味で、審判員も日本サッカーのレベルアップのためにすごく大きなキープレーヤーである。



## リスペクトアウォーズ2025

「リスペクト・フェアプレーに関する事業・取り組み部門」と「リスペクトのためのちょっとした工夫部門」の二つの部門で自薦他薦を問わず応募。事業・取り組み部門はJFAリスペクト委員会による1次選考を通過した7件について、一般投票を実施。最も票を集めた取り組みを大賞とし、9月13日に表彰した。

### リスペクト・フェアプレーに関する事業・取り組み部門

#### ■大賞：FUKUSHIMA WWW.

福島県で誕生したアマチュア女子サッカーチーム「FUKUSHIMA WWW.」は、サッカーの対戦相手として訪れた他県のチームに対し、東日本大震災の教訓や防災意識の重要性を伝え、未来の防災・減災への意識向上に繋げ、サッカーによる地域活性化の一つのモデルとして活動している。



#### ■特別賞

##### ●ウェルフェアオフィサー賞：（公財）東京都サッカー協会／規律・裁定委員会／WOG 部会

5つの専門委員会と12の加盟団体による合同でのセーフガーディングワークショップを開催。個々の環境に応じた推進活動の実践につなげられるよう、「リスペクト・フェアプレー」に取り組む姿勢の確認、連携、意識、課題抽出と改善について共有した。



##### ●ダイバーシティ賞：Inter Tsukuba

つくば市近郊の外国人と日本人により結成された社会人チームで、外国人が主体的に運営に参加。国籍、人種、宗教、言語、文化の違いを超えて、サッカーを通じて多様性を高め合い、尊重し合う関係性を築いている。



##### ●インクルーシブ賞：一般社団法人 S.C.P. Japan

障がいの種別を限定しない女の子のための大会「女子バドミントンフェスタ」を開催。事前に「リスペクト」の価値やセーフガーディングの基本方針を共有し、勝敗よりも「安心して選手が主体的に楽しめる」環境づくりを重視した大会を実現した。



### リスペクトのためのちょっとした工夫部門

#### ■会長賞：（公財）北海道サッカー協会女子委員会

U-15女子サッカーリーグの申し込み時にクラブウェルフェアオフィサー（CWO）、所属クラブにおいてリスペクト・フェアプレーを推進するリーダーの記名を義務付け、パンフレットにCWOの役割について説明を掲載。また、子どもたちがリスペクト宣言や大会の目標を記入できる欄を設けるなど、全チーム・選手が手に取るパンフレットでリスペクトを推進する工夫を取り入れている。

#### ■会長賞：太田友宜さん

フェアプレーにあふれる行為を示すグリーンカードをスマホケースに携帯し、サッカー内外問わず、リスペクト精神溢れる行動を実践してくれたサッカー仲間やサポーター、家族に対して、咄嗟に褒めたり称えたりしたい時に自分の思いを表現する「グリーンカード携帯作戦」を実践。

##### ■各事業・取り組みの詳細はこちら

<https://www.jfa.jp/news/00035375/>



### 表3 ユース審判員パブリックコメント結果（抜粋）

#### 審判のやりがいや喜び

- ・サッカーを違う視点から見ることができる
- ・素晴らしいプレーを間近で見ることができる
- ・試合をつくる一員であること
- ・リスペクトある瞬間を間近で見れること、グリーンカードを出す瞬間や最後に今日の審判ありがとうございましたと言われること

#### 安心・安全にサッカーを楽しめるようにするために、自分たちができること

- ・審判も対戦相手もサッカーが好きな仲間という心を常に持つこと
- ・純粋にサッカーのプレーで競う
- ・自分たちももっと勉強をしていく、経験を積む
- ・「競技規則」の徹底的な理解

#### 安心・安全にサッカーを楽しめるようにするために、大人ができること

- ・審判のジャッジに反論しない、審判を尊重する
- ・危険なプレーをさせない。自分のチームのコーチがしっかり指導する
- ・指示ばかりせずに選手を見守る
- ・指導者が大きな声やジェスチャーで異議を言うのは子供がそれを見た場合「やっていいんだ」という感覚が備わってしまうため、特に低年代の指導者は言動に責任を持つてほしい
- ・子供が審判をしても馬鹿にしないでほしい
- ・間違いは指摘して、良いところは褒めること。その少しの気遣いで審判をやっている自分からすると安心するし心の支えになります。



●全ての結果はこちら [https://www.jfa.jp/respect/fairplaydays/pdf/youth-referee\\_child\\_public\\_comment.pdf](https://www.jfa.jp/respect/fairplaydays/pdf/youth-referee_child_public_comment.pdf)

### ハネルデイスカッショ

#### 「非常に良かった」ユース審判員の心の声

「審判員へのリスペクト」をテーマとしたハネルデイスカッションでは、扇谷委員長と影山雅永JFA技術委員長、名木利幸JFA審判マネージャー、海堀あゆみWEリーグ理事／なでしこリーグ理事長、ユース審判員の経験がある林原晴審判員が登場。7月から8月に実施した「ユース審判員パブリックコメント」の回答結果を踏まえ、今井委員長の進行によって意見が交わされた。

扇谷委員長は「都道府県の試合では、判定に不満を持ったチーム関係者が試合後に審判員に詰め寄り、審判員が危険にさらされるケースもある」と話し、名木氏も「全国大会などでは、キャリアを積んだ審判員だけが試合を担当しているわけではない。主審だけではなく、副審や第4の審判員に対する監督やコーチからの直接的な言葉が大きなプレッシャーになっている」と指摘した。

また、林原氏はユース審判員時代を振り返り、「（社会人の試合では）若い審判員だからと、年齢が上の選手や体格の良い選手が責めてくることがある。経験が浅い分、他の審判員よりも走るようにしているが、若いがゆえに不利な状況に立たされやすいというのはユース審判員のときに感じたことで、非常に良かった」と述べた。

海堀氏はGKとしてプレーしていた視点から、GKと審判員はミスが目立ちやすい点が似ていると発言。「いくら良いプレーをしていても、一つのミスが目立ってしまうし、その一つのミスで試合の流れや結果を変えてしまうこともある。審判員の皆さんが感じているプレッシャーやミスに対する不安は共感できる」と語った。

また、育成年代の試合では監督やコーチが審判員に抗議することで、ベンチにいる選手たち、さらには会場で応援しているチームメイトや保護者らも「自分たちも言っているんだ」と勘違いして同じ行動を取ってしまう実態がある。それによって、審判員を一齐に攻撃する状況になりかねない。審判員に抗議する姿を見ている者たちが、それを「一緒に戦っているんだ、こうやって戦うことが正義なんだ」と考えるのは非常に危険であることは言うまでもない。誰もが安心・安全に試合ができる環境をもっと広げていかなければならない。

ファジアーノ岡田での事例も挙げた。対戦相手の選手がピッチ上で倒れた際にボールを外に蹴り出したプレーを止める、という当時の暗黙のルールに対して、同クラブはそれをしないことを決めた。その理由は、その選手が欺いている可能性があるからだ。それを認めると相手をだます行為を助長しかねないことから、主審にすべての判断を委ねることにしたという。これに対して、当時、主審をしていた扇谷委員長は「主審としては非常にやりやすかった」と回顧。その理由について「選手の状況を見て試合を止めるかどうかは、基本的ににはわれわれ審判員の任務であり、責任を持って判断している。実際、今シーズンのJリーグでは、（審判交流プログラムにより）欧州のレフェリーが笛を吹く試合もあるが、選手が倒れても流すシーンは多くある」と述べた。

#### 競技規則を知ることがリスペクトへの第一歩

ユース審判員パブリックコメント（対象は中学1年生～高校3年生）の回答も紹介された（表3参照）。質問の一つ、審判員のやりがいや喜びに対しては、「違う角度からサッカーに参加できる」「感謝を伝えられたとき」「みんなから挨拶してもらったとき」などの声があり、林原氏は「自分が取り組みできたことが選手に還元できたとき、それによって良い評価をしても良かったときには、選手のためになっているのかなと感じられて

自分のやりがいになっている」と答えた。

「安心・安全にサッカーを楽しむるようになるために大事なことは何か」という問いに林原氏は、「審判目線と言うと、皆さんにある程度のルールを知っていたくこと。私たち審判員はプロ意識を持って試合に臨んでいるのでルールは熟知している。皆さんにも、少しでもルールを知る努力をしていただけると、 unnecessary 異議や暴言を減らせるのではないかと思う」と回答。また、自身の父親がサッカー4級審判員の資格を持っていることに言及し、「大人が審判資格を持っていて競技規則を分かっているならば、子どもの試合を見たときに審判員のジャッジが論理的に見えてくると思う」と述べ、「サッカーはエモーションなスポーツである分、すべてに感情を

ユース審判員時代のつらい経験を明かした林原氏。審判員としても「年上の選手に責められると怖いし、不安も感じていた」と話す

